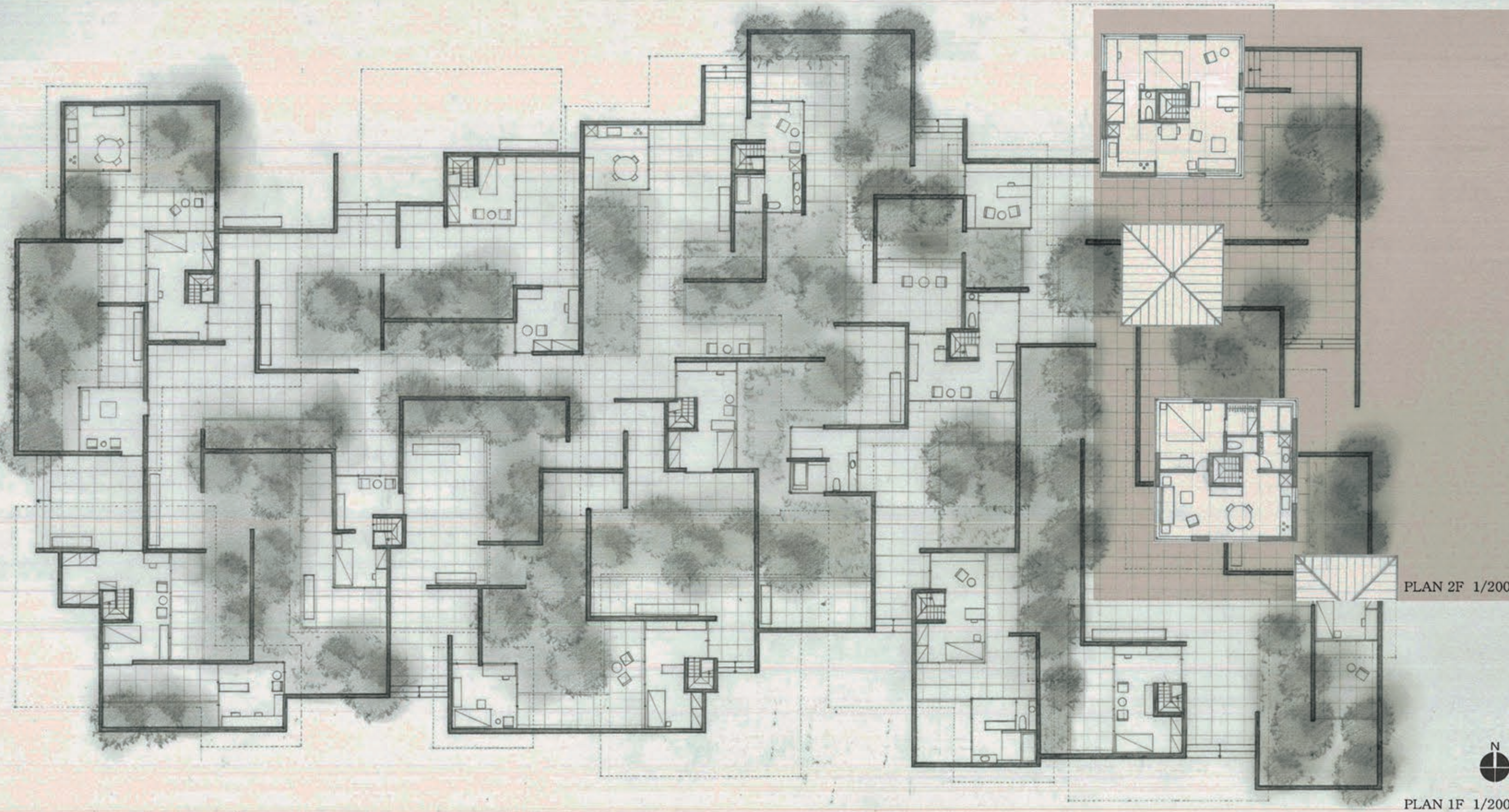


Fragments of Secret Garden



PLAN 2F 1/200

PLAN 1F 1/200



SECTION 1/200

まだこの住宅街で各々の家が庭と呼べるようなスペースを持っていた頃、幼かった私は家の庭の散策中に、一部が破損した隣家のブロック塀の隙間をすり抜けて、今まで来たことのない別世界の庭に迷い込んでしまったことがある。

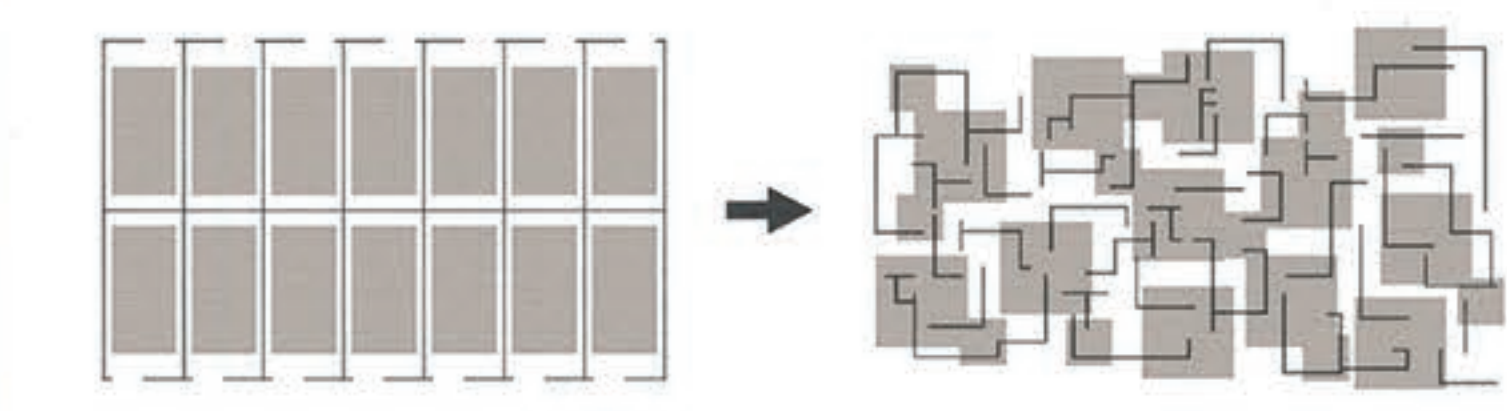
多少の欠陥が許容されたあの時代は、幻想的な体験が日常のすぐ傍にあり、その大らかさが街の豊かさにつながっていた。

しかし近年、広がった土地は新たに引かれる境界線により極限までスライスされ、そこに庭のない狭小住宅が押し込まれはじめている。これは街を息苦しい飽和状態に近づける「境界」のあり方に無理があるのかもしれない。

そこで今は「境界」の過渡期と捉えてみる。するとあの秘密の庭に繋がった、隙間の空いたブロック塀こそが、住宅街が自らあるべき姿に変形している只中の形相であったように感じるのである。



境界線の具現であるブロック塀の、共有壁としての側面を拡張し、これを住宅街の地上階の構成に介入させることで、住戸ごとに完結しない連鎖的な集合体が構築されていく。またこの閉じない共有壁が街区内に複雑に編み込まれることで、地続きに点在する不定形の庭が発生し、それが住戸間を媒介する曖昧な境界領域を形成する。



街区という一つの大きな庭が、共有壁によって分節される。それらの破片の片隅に、各々が相互に良い距離を保ちつつ屋根をかけていくことで、それらはちょうどクリストとジャンヌクロードの「アンブレラ」のように、地上に散りばめられた見え隠れする庭の空間性をインジケートするものとなる。

近代風景の重要なエレメントとして、境界線を明示してきたブロック塀は、機能から解放されることで、その記憶と幾何学を継承しながらも、新たな住宅街の風景を構築していく。

